

視線量の多少が印象形成に及ぼす影響

飯塚 雄一

概 要

二者会話中の一方の相手に対する視線量の多, 少が観察者に与える印象を検討した。実験計画は 2 (視線量) × 2 (性) × 2 (刺激人物) の混合計画。刺激人物に対する被験者の評定を因子分析し, 各因子得点に分散分析を施した。第1因子は視線量が多い時に, 暖かく好意的であると見られていた。視線量多条件で, 女性—男性より女性—女性の組合せの方が暖かいという印象が得られていた。第2因子は視線量が多い時に, 強気で自信があるという印象がもたれていた。第3因子は対面相手が異性の時により緊張していると見られていた。また刺激人物の視線量が多い時に, 対面相手の話に関心・好意を持ち相手と気が合い性的魅力を感じたと認知した。

キーワード: 視線量, 印象形成

I. 問 題

視線は対人関係のなかで文脈により様々な意味をもつ。例えば, 視線が好意を伝達するなどである。この場合, 視線を従属変数として, 好意を抱いている人同士の間で視線量が多くなるという研究がみられる。それでは逆に, 視線量を独立変数として扱い, 相手を長く見ている人は, 相手に好意的, 友好的印象をもっているという外部の観察者が評価するかという問題が生ずる。

Cook & Smith (1975) は, 視線量のパターン (普通の視線パターン, 持続する視線, 回避的視線) が, 印象に与える影響を検討している。その結果, サクラが被験者を見る時間が長くなると, 被験者はサクラをより好意的に評価したという。このように, 印象形成における視線の役割を検討した一連の研究がある。そして, 視線や EC (Eye Contact; 以下 EC と略称) が印象形成に及ぼす影響については多くのことが知られている。視線は好意や魅力 (Argyle, Lefebvre, & Cook, 1974; Kleinke, Meeker, & LaFong, 1974; Thayer & Schiff, 1974, 1977; Cook & Smith, 1975; Abele, 1981), 能力 (Kleck & Nuessle, 1968; LeCompte &

Rosenfeld, 1971; Hasse & Tepper, 1972), 信頼性 (Hemsley & Doob, 1978; Kraut & Poe, 1980), や支配性 (Dovidio & Ellyson, 1982) などの認知に影響を与える。これらの研究結果に共通してみられるのは, EC が多い人物に対してポジティブな評価を与えられていることである。これらの研究では視線パターンを組織的に変化させるサクラを使うことが多い。そしてほとんどの研究で, 視線総量 (%) や EC 量を変化させている。視線頻度を操作した研究もある (Ellsworth & Carlsmith, 1968)。一般に, 研究は次の仮説を支持している。つまり, 視線量が多く, 視線の平均持続時間が長い人は好意的印象を与え, より多く好まれるのである。

さて, 本研究では, 二者会話中の一方の視線量を実験的に変化させる。そして相手に対する視線量の多, 少が, 外部の観察者にどのような印象を与えるかを検討する。多くの研究でテレビモニターを用いて他者の相互作用を外部の観察者である被験者が見て印象形成をするという方法をとっている。従来この種の研究では, 印象形成の反応は主に評価性 (Evaluation; E), 力量性 (Potency; P), 活動性 (Activity; A) の3次元のOsgoodらのSD尺度から E, P, A の因子を代表する尺度を選び出し印象評定に使っ

ているものが多い (Kleck & Nuessle, 1968; Cook & Smith, 1975; Abele, 1981)。Cook & Smith (1975) は印象の自由記述法によって、視線回避が不安や緊張、自信のなさに関連した印象を得ている。また Argyle & Cook (1976) が指摘しているように、例えば視線回避などには、不安や緊張に関連した印象が予想されるが、Osgoodらの尺度にはそれらに関連のある尺度が少ない。このことから、もっとより多様性のある尺度を使うとか、自由記述を採用するのが望ましいと示唆している。本研究では、彼らの示唆に従いできるだけ多様な尺度を使用し印象を評定させる。主に先行研究の諸結果より、誠実さ、不安、緊張などに関連する尺度を含めた。そして次の仮説を検討する。

仮説 1 a. 視線量の多い刺激人物は、より誠実であると評価されるであろう。

仮説 1 b. 視線量の多い刺激人物は、不安が低いとみられるであろう。

仮説 1 c. 視線量の多い刺激人物は、緊張が少ないとみられるであろう。

さて、2つ目の要因として、会話しているペアの性の組合せについても検討する。Thayer & Schiff (1974, 1977) の研究が示すように、同じ視線パターンであっても同性同士か異性同士かによって印象が変わってくるのが予測される。したがってここでは、次の仮説によりこれを検討する。

仮説 2. 視線量の評価が、性の組合せにより異なってくるであろう。

ところで、視線が印象に及ぼす影響をみる場合、会話場面であるなら会話の話題を問題にする必要がある。Ellsworth & Carlsmith (1968), Schweritz & Helmreich (1973) の研究が示すように、視線の効果も言語内容が変わると変化する。したがって、本研究では言語内容の影響をなくすため、VTRを使用し音声を使わないで映像のみを提示し印象を形成させる。さらに、VTRを使うことで実際の相互作用では意識されにくい視線がより顕著になって視線量の操作が有効になるという利点もある。

さて、Abele (1981) は二人が相互に未知か既知かという情報は印象における視線の意味に影響を与えるという。例えば、観察者に二人が

既知であることを知らされている場合、視線の印象形成に及ぼす影響は増幅されるという。本研究では、相互に既知であるという条件で実験を行う。

II. 方 法

被 験 者: 女子学生 77名

刺激人物: 男女大学生 各2名

実験計画: $2 \times 2 \times 2$ の混合計画。第一の要因は視線量の多、少 (被験者間配置)、第二の要因は性の組合せ、女性-女性、女性-男性 (被験者間配置)、第三の要因は刺激人物 (被験者内配置) である。

刺激ビデオの作成: 2人 (A, B) が向かい合って椅子に座る。学生生活についての予め決められた10項目の質問と答えのやりとり (約2分間) をVTRに収録する。2人の話す量は大体等しくしてある。Aは顔を中心とした上半身、Bは後姿のみ分かるように撮る。AがBを見ているかどうかは画面からよくわかる。撮影時には、Bは常にAを見ているように教示してある。Aの視線以外の非言語行動 (微笑、うなずきなど) はすべて一定に保つよう訓練がなされた。2人は中性的な表情をして、お互いに相手が話し終わったら1回うなずくようにしてある。Aの視線量の操作の仕方は次のようにした。視線量多条件では、10項目のうちの2, 4, 7, 9番目 (全4項目) について話している時だけ、視線を外しておく。その他の場合はずっと相手を見ている (全対面時間の約87%の視線量になる)。視線量少条件では、上と同じ項目を話している時だけ相手を見て、あとはずっと視線を外している (全対面時間の約13%の視線量になる)。視線を外している時は、ずっと右斜め下辺りを見ているようにした。画面に顔の见えていない対面者 (B) は、ずっと相手を見ているようにした。このように多条件と少条件の視線量の差を大きくしたのは、視線パターンの違いをより明確に強調するためである。

手続き: 暗幕のある視聴覚教室で、被験者が集団的にビデオを見る。1グループ18名である。ビデオを見た後、机の上に予め用意された質問

紙に記入する。被験者がビデオを見る前に次のような教示をする。

「今日、ここにおいて頂いたのは、＜人物についての印象に関する実験＞に参加してもらうためです。これから、2人の人が向かい合って話をしている場面のVTRを2つ見て頂きます。このビデオはそれぞれわずか2分間ほどの短いものですからよく見ていて下さい。まず最初のビデオを見て、1a（2a, 3a,...）となっている質問紙を記入します。終わりましたら、2つめのビデオを見て、次に1b（2b, 3b,...）とある質問紙に記入して終了です。なお、話の内容が印象に影響を与えないようにするため音声は消してあります。それでは、本番に入る前に、ここでちょっと見本のビデオを見て頂きます。……（ここで約30秒くらいのサンプルビデオを見せる）……大体このような場面です。正面を向いている人の印象をお聞きます。なお、画面にでている2人はお互いに以前からの知り合いです。そしてこれから見る2つのビデオは、＜女性と男性＞（または女性と女性）の対面場面です。」

教示が終ると、暗幕によって教室を暗くし、テレビモニターの画面がより鮮明に見えるようにした。1つ目のビデオが終ると明かりをつけて、被験者はすぐに1枚目の質問紙に記入した。記入中は隣に座っている被験者と話をしないように注意した。全員が1枚目に記入し終わったら、再び明かりを消して2つ目のビデオを見る。2つ目のビデオが終ると明かりをつけて、被験者はすぐに2枚目の質問紙に記入して実験は終了した。実験終了後、後から参加する被験者に内容を話さないように注意した。

倫理的配慮としては、被験者に口頭で実験の説明を行い、回答は無記名であり、データは研究以外の目的では使用しないことを説明した。**従属変数:**（1）刺激人物の印象…刺激人物の印象を問うSD形式による7段階尺度で評定する。“緊張した—くつろいだ”、“誠実な—不誠実な”、“注意深い—不注意な”、“弱気な—強気な”、など計16項目である。（2）刺激人物が対面相手に対して抱いている感じを推測する尺度で7段階評定である。“話に関心を持っている”、“相手に好意を感じている”、“相手に性

的魅力を感じている”“お互いに気が合っている”、の4項目である。（3）刺激人物の視線量について、「その人物は大体、全会話時間のうちのどのくらいの時間（%）相手を見ていたと思いますか」という項目で推定する。

Ⅲ. 結 果

1. 操作の妥当性の検討

被験者による刺激人物の視線量の推定は、視線量多条件で推定平均値が64.8% ($SD=16.9$)＜実際の視線量…87%＞、視線量少条件で推定平均値が28.4% ($SD=18.9$)＜実際の視線量…13%＞、となった。実際操作した視線量とは幾分ずれているが、推定値においても視線量の多少の程度は維持されており、視線量の多少の操作は有効であったといえよう。

2. 刺激人物の印象

男女各2名の刺激人物に対する被験者の評定を加算したものをデータとして分析した。評定尺度16項目を因子分析（主因子法）して3因子を抽出し、これをバリマックス回転した。第1因子に高い負荷を持つ尺度は、“暖かい—冷たい”、“細やかな—神経質な”、“好意的な—非好意的な”、などで＜暖かさ・冷たさ＞因子といえよう。第2因子に高い負荷を持つ尺度には、“弱気な—強気な”、“不安な—自信のある”、“内向的な—外向的な”、があり＜強気・不安＞因子といえよう。第3因子には、“緊張した—くつろいだ”、“注意深い—不注意な”の尺度に高い負荷があり＜緊張・くつろぎ＞因子といえよう。これら3つの因子は全分散の58.0%を説明していた。

次に、これら3因子の各因子得点（表1）に視線量、性の組合せ、刺激人物要因の $2 \times 2 \times 2$ の分散分析を施した（表2）。この結果、視線量の主効果が第1と第2の因子で有意であった。

まず、第1の因子については視線量が多い時に、より暖かく、好意的で、誠実であると見られていた。また、刺激人物の主効果も有意となり、刺激人物2の方がより暖かいと評定されていた。視線量と性の組合せの交互作用が有意となった。下位検定の結果、女性—女性でも女性—

表1 因子得点の平均値と標準偏差

因子	刺激人物	女性-女性				女性-男性			
		視線量 多		視線量 少		視線量 多		視線量 少	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
第1因子	1	0.45	0.60	-1.15	0.93	-0.01	0.70	-0.62	0.83
	2	0.46	0.68	0.26	0.98	0.42	0.81	0.19	0.78
第2因子	1	-0.84	0.76	-0.03	1.20	-0.10	0.97	0.66	1.07
	2	0.21	0.81	0.33	0.81	-0.14	0.60	-0.08	0.54
第3因子	1	-0.13	0.75	-0.04	0.86	0.43	0.83	0.63	0.69
	2	-0.10	0.82	-0.26	0.99	-0.52	0.67	-0.02	0.61

表2 因子得点の分散分析 (F値)

	1因子	2因子	3因子
A (視線量)	36.21***	14.91***	
B (性の組合せ)			6.27*
A×B	4.80*		3.28+
C (刺激人物)	17.14***		7.82**
A×C	7.59**	3.80+	
B×C		9.34**	4.95*

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$

男性でも、視線量が多い時により暖かいと感じられていた。また、視線量少条件では、性の組み合わせの違いは見られなかった。視線量多条件において、女性-男性より女性-女性の組み合わせにおいてより暖かいという印象が得られていた。このように、同じく視線量が多い場合でも、相手が同性か異性かによって、暖かさの印象の程度に違いが見られることがうかがえる。次に、視線量と刺激人物の交互作用が有意となった。つまり、刺激人物1では、視線量が多い時により暖かい印象を与えているが、刺激人物2では視線量の多少が暖かさの印象の違いとはなっていない。また、視線量が多い時、2人の間に暖かさの因子の差はないが、少ない時には、刺激人物2より1の方が暖かいと感じられている。

次に第2因子については、視線量が有意であった。つまり、視線量が多い時に、強気で自信があり、堂々としているという印象がもたれている。

第3因子については性の組合せの主効果が有意となった。つまり、対面相手が異性の時により緊張していると見られていた。また、刺激人物の主効果も有意となった。つまり、刺激人物1の方がより緊張していると見られていた。

このように、視線量が多い時に、暖かく、誠実で素直で、強気で自信があり、くつろいでいるという印象が得られていた。したがって、仮説1 a, 1 b, 1 c は全て支持された。

仮説2 では同じ視線パターンであっても同性同士か異性同士かによって印象が変わることを予想した。しかし、性の組合せの主効果は有意とはならなかった。第3因子については、視線量と性の組合せの交互作用に有意な傾向がみられた。つまり男性の刺激人物は、視線量多条件では、相手が同性でも異性でもよりくつろいで、ゆったりしているという印象がもたれていた。また、女性-男性の組合せより女性-女性や男性-男性の組合せの方がよりくつろいで、ゆったりしていると認知されていた。したがって、仮説2 は部分的に支持されたといえよう。

3. 刺激人物の対面相手に対する印象の推測

次に、被験者に刺激人物が対面相手に対して抱いている感じを推測させた。印象の推測値の平均と標準偏差を表3に示した。そして、推測値4項目それぞれについて $2 \times 2 \times 2$ の分散分析を施した(表4)。その結果、視線量の主効果がすべての項目について有意であった。つまり、刺激人物の視線量が多い時に、対面相手の話に関心を持ち、相手と気が合い、好意を持ち、また性的魅力も感じていると被験者は認知していた。しかし、性の組合せの主効果が有意であったのは、性的魅力の項目だけである。つまり、女性-男性の組合せの方が女性同士より性的魅力の感じが強いと評定されていた。好意の項目について刺激人物の主効果が有意となり、人物2の方がより好意的にみられていた。また、「話に関心」と「気が合う」と「好意」の項目について視線量と刺激人物の交互作用が有意であった。つまり、視線量では2の方が、話に関心があり、気が合い、好意を持っていると評定されていた。また、刺激人物2において多少条件で上の3項目それぞれに差はなかった。

表3 刺激人物の対面相手に対する印象の推測の平均値と標準偏差

項 目	刺激人物	女性-女性				女性-男性			
		視線量 多		視線量 少		視線量 多		視線量 少	
		M	S D	M	S D	M	S D	M	S D
話に関心	1	5.11	1.37	3.17	1.54	4.67	1.29	2.83	1.17
	2	4.44	1.01	4.28	1.28	4.56	1.34	3.72	1.52
気が合う	1	4.67	1.11	2.72	0.93	3.89	0.99	2.72	1.37
	2	4.17	0.96	3.83	1.17	4.11	0.99	3.67	1.41
好 意	1	4.72	1.10	2.89	1.10	4.11	1.05	2.88	0.87
	2	4.39	0.95	4.22	1.08	4.50	1.12	3.83	1.30
性的魅力	1	3.33	1.41	2.61	1.21	3.67	1.11	3.06	1.22
	2	3.50	1.21	3.00	1.15	3.94	0.85	3.44	1.21

表4 印象の推測値の分散分析 (F値)

	話に関心	気が合う	好 意	性的魅力
A (視線量)	50.71***	45.36***	47.94***	16.26**
B (性の組合せ)	3.30 ⁺	2.98 ⁺		8.35**
C (刺激人物)		3.66 ⁺	7.06**	
A × C	6.43*	6.32*	6.35*	

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$

IV. 考 察

まず、被験者による刺激人物の視線量の推定について考察する。視線量多条件の実際の値は87%で、視線量少条件では13%である。結果の推定値をみると、被験者は実際にはもっと多いのに少なめに推測し、実際にはもっと少ないのに多めに推測していることがわかる。同様の結果が他の研究でもみられている (Kleck & Nuessle, 1968)。すなわち、被験者による刺激人物の視線量の推定値が、視線量多条件で70% (実際は80%)、視線量少条件で20% (実際は15%) となったという。このようにみると、被験者は視線量の推定において、極端な値を避けるような傾向があることがうかがわれる。こういう傾向は、中心化傾向とでも呼べるかも知れない。一般的に、ずっと見つめたり、また全く相手を見ないのは失礼であるとされている。このことが、われわれが中程度のレベルの視線量を好む一つの理由かも知れない。おそらく被験者は、視線量について自らが持っているステレオタイプの期待に沿うような推測をしたために本研究のような推測値になったのかもしれない。また、Kleinke (1986) によると、実際の相互作用場面で、他者からの視線量の推測の正確さに影響を及ぼす要因としては、相互作用自体にどれほど熱心に注意を払っているか、とか動機や期待などがあるという。他者の視線量や視線パターンを推測する能力や正確さを調べた研究は少ないので、今後の研究が待たれる。

さて、印象評定項目の因子分析の結果、＜暖かさ・冷たさ＞、＜強気・不安＞、＜緊張・くつろぎ＞と命名された3つの因子が得られた。本研究では従来のSD尺度に加えて視線の印象

に関連すると思われる種々の尺度一特に、視線回避と関連する不安や緊張の印象尺度一を含めたのが特徴である。その結果、上記のような視線の印象をより明確に特徴づける次元が見出された。

そして仮説1 a, 1 b, 1 cは刺激人物の視線量の多少によって、外部の観察者は誠実さ、不安、くつろぎという点で異なるように評価すると予想した。結果に示されたように、これらの仮説は全て支持された。すなわち、外部の観察者は、相手を多く見る人を、より誠実で、不安が少なく、くつろいでいるというように評価することが明らかにされた。これは従来の結果と一致しており、相手を多く見る人が一般的にポジティブに評価されることが本研究でも確認された。

仮説2は、同じ視線パターンであっても同性か異性かによって印象が変わるというものであった。しかし、この仮説は部分的に支持されるに留まった。性の組み合わせの主効果は有意ではなかったが、表2に示されているように、3因子全てについて、女性が男性を見る組み合わせでは、一貫して平均得点が最も低くなっていた。すなわち、女性被験者は、この女性-男性の組をより誠実で、不安で、緊張していると見ていく傾向がうかがわれる。また第3因子 (＜緊張・くつろぎ＞因子) について視線量と性の組合せの交互作用に有意な傾向が見出された。つまり、視線量多条件で、異性同士 (女性-男性) の組

合せは同性同士（女性同士）の組合せより緊張し、神経質になっていると認知されており、この＜緊張・くつろぎ＞因子についてのみの組合せの影響が表れていた。

次に、仮説としてはとりあげなかったが、被験者に刺激人物が対面相手に対して抱いている感じも推測させた。この結果、被験者自身が刺激人物に対してもつ印象と同様の傾向が見出された。つまり、刺激人物の視線量が多い時に、対面相手の話に関心をもち、相手と気が合い、好意をもち、また性的魅力も感じていると被験者が認知していることが明らかにされた。しかし、性の組合せの主効果は、刺激人物の印象の結果と同様、有意とはならなかった。性の組合せの影響が最も表れると予想した「性的魅力」の項目についても主効果、交互作用ともに有意ではなかった。Thayer & Schiff (1977)は、被験者が刺激人物の同性ペアより異性のペアについてより大きい性的関心の帰属をすることを報告している。しかし本研究では性の組合せの効果はあまり明確には表れてはいない。この理由の1つに、刺激ビデオの作成に問題があったと思われる。つまり、刺激人物は正面向きで非常にはっきりと画面に出ている。しかし、対面相手は後姿のみが画面に出ており、髪型などからなんとか男女の区別はできるという程度なので、性の違いが被験者に十分強く印象づけられなかったのかもしれない。2人の人物の配置をもっと工夫してVTRから性の違いが十分よくわかる場面であったら、性の組合せの効果ももっと明確に出たかも知れない。

さて前に述べたように、本研究の被験者は女性のみであるので、男性観察者についても検討する必要がある。われわれのディコーディング研究（音声を消して映像のみ使用）は、視線の表情をより強調し目立たせるためにとった方法である。得られた結果は外部の観察者の印象であり、相互作用の当事者のものではない。今後の課題としては、実際の相互作用場面の当事者が、視線量の多少についてどのような印象を持つかについて検討し、結果の比較をする必要がある。

本研究では、評定の集約値としての印象を検討してきた。最近の、情報处理的アプローチに

基づく研究では、そのような印象の基礎となった情報がどのような形で記憶されているかにも注目し、人物について形成される記憶表象の構造に関する多くの知見が生み出されている（唐沢、池上、唐沢、大平、2001）。

文 献

- Abele, A. (1981): Acquaintance and visual behavior between two interactants: their communicative function for the impression formation of an observer. *European Journal of Social Psychology*, 11, 409-425.
- Argyle, M., & Cook, M. (1976): *Gaze and mutual gaze*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Argyle, M., Lefebvre, L., & Cook, M. (1974): The meaning of five patterns of gaze. *European Journal of Social Psychology*, 4, 125-136.
- Cook, M., & Smith, J. M. C. (1975): The role of gaze in impression formation. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 14, 19-25.
- Dovidio, J. F., & Ellyson, S.L. (1982): Decoding visual dominance attributions of power based on relative percentages of looking while speaking and looking while listening. *Social Psychology Quarterly*, 45(5), 106-113.
- Ellsworth, P. C., & Carlsmith, J. M. (1968): Effects of eye contact and verbal content on affective response to a dyadic interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 10, 15-20.
- Hasse, R. F., & Tepper, D.T. (1972): Nonverbal components of empathic communication. *Journal of Counseling Psychology*, 19, 417-424.
- Hemsley, G.D., & Doob, A.N. (1978): The effect of looking behavior on perceptions of a communicator's credibility. *Journal of Applied Social Psychology*, 8, 136-144.
- 唐沢 譲・池上知子・唐沢かおり・大平英樹

- (2001): 社会的認知の心理学, ナカニシヤ出版
- Kleinke, C. L. (1986): Gaze and eye contact: A research review. *Psychological Bulletin*, 100, 78-100.
- Kleinke, C. L., Meeker, F. B., & La Fong, C. (1974): Effects of gaze, touch, and use of name on evaluation of "engaged" couples. *Journal of Research in Personality*, 7, 368-373.
- Kleck, R.E., & Nuessle, W. (1968): Congruence between the indicative and communicative functions of eye contact in interpersonal relations. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 7, 241-246.
- Kraut, R. E., & Poe, D. (1980): Behavioral roots of person perception: The deception judgments of customs inspectors and laymen. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 784-798.
- LeCompte, W.F., & Rosenfeld, H.M. (1971): Effects of minimal eye contact in the instruction period on impressions of the experimenter. *Journal of Experimental Social Psychology*, 7, 211-220.
- Sherwitz, L., & Helmreich, R. (1973): Interactive effects of eye contact and verbal content on interpersonal attraction in dyads. *Journal of Personality and Social Psychology*, 25, 6-14.
- Thayer, S., & Schiff, W. (1974): Observer judgment of social interaction- Eye contact and relationship inferences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 110-114.
- Thayer, S., & Schiff, W. (1977): Gazing patterns and attribution of sexual involvement. *Journal of Social Psychology*, 101, 235-246.

Influence of the Amount of Gaze on Observer Impressions of Gaze Pairs

Yuichi IIZUKA

Abstract

In this experiment, selected stimulus dimensions of interpersonal gazing-amount of gaze, stimulus persons and sexual composition of the interacting pair-were examined for their impact on observer's evaluations. Observers viewed videotapes of a person whose visual behavior was systematically varied while conversing with a person of the opposite sex. Female stimulus persons displayed two different visual amounts: 87% and 13%. We found that observer's evaluations with regard to warmth, anxiety, and relaxation of a gaze pair were differentially affected by the degree of eye contact between the gaze pair. When a female of a gaze pair exhibited a high amount of gaze, they tended to be rated by observers as warmer, less anxious and more relaxed than when they exhibited a low amount of gaze. High eye contact would appear to be more sincere for female-to-female pairs as opposed to female-to-male pairs.

Key Words and Phrases: amount of gaze, impression